

イメージについて

嶋田厚

著述家としてのジャン・ポール・サルトルが、初めて読者の前にその姿を現わしたとき、彼が携えていたものはイメージをめぐる問題であった。

フッサールの現象学、なかんずく、その「志向性」の考え方に強く触発された若きサルトルの処女作『想像力』(L'Imagination, 1936)は、「イメージは意識のあり方であり、意識そのものである」という立場からなされた、デカルト以来の伝統的概念、すなわち、「イメージは意識の内容、あるいは構成要素であり、従って〈事物〉に属している」という通念に対する歴史的批判を、その内容としている。

続いて出されたその本論とも云うべき『想像力の問題』(L'Imaginaire, 1940)は、前著での予告どおり、「何ものかについての意識」としてのイメージの現象学的な記述が、「確実な事象」と「蓋然的事象」に分けて進められ、さらに「心的生活におけるイメージの役割」「想像的生活」という二章の考察を経て、結論でその本質規定が試みられている。

この研究の眼目は、「現実を志向する知覚」という意識のあり方と強く弁別し、あるいは対比することによって、「現実を無化して行なう志向であり、非現実を措定する意識」としてのイメージの超越的で積極的な特性を強調することにあった。

総じて、処女作はその後の著者の全行程を予兆する、としばしば云われている。それは幾らか多過ぎる例外を持った原則とも思われるが、サルトルの場合、おおむね原則どおりと見て差支えないだろう。知覚—現実、イメージ—非現実というこの意識についての「三元論」は、『存在と無』(L'être et néant, 1943)をはじめ、その後の彼の思考と問題意識に、終始まとい続けるいわば主調低音なのだから。

ところで、若きサルトルがその知的探求の出版において、あえて「イメージ」の問題を取上げたのは何故であつたらうか。わが国におけるサルトルの紹介者の一人は、一九三一年に出版されたE・ウィルソンの評論集『アクセルの城』(Axel's Castle)を挙げ、ウィルソンがその書でとらえた「想像力による非現実世界の創造」という文学における時代精神との関連を示唆している。この示唆を決して的外れと云うつもりはないが、しかし、その関連が極めて逆説的な関連であつただけは、念のため指摘しておく必要があるだろう。何故なら、サルトルは、確かに一方で、取上げられた作家たちから、文学における想像的なものの作用と、その自覚的な態度の意味とを十分汲みとつたには違いない。しかし、にも拘らず他方では、そこに創造された想像的生活——アクセルの城——は、彼がすでにそびらに向けて、見返ろうともしたくなかつた世界であつただけから。

三〇年代のサルトルにとって、今世紀初頭の想像力文学の華々しい達成と、そこに齎された豊富な「内面的生活」に心動かされるよりは、迫り来る大戦前夜の息苦しい社会的状況と、とりわけ、それにあざなわれた知的不毛性への苛立ちこそ、その圧倒的な関心事であつた。ヨーロッパを動かした「人民戦線」の喧噪の最中に、窓を鎖して書齋に閉じこもる彼の姿は、戦後のサルトルを見馴れた目には、あるいは一見奇異な感を喚びおこすかも知れない。しかし、事實は、むしろ極めて社会的な、彼のいわゆる「世界—内—存在」としての鬱屈が、凝って集約されたところに、この二冊の書物の成立の契機が潜んでいた。マルクス主義——後になつては、それをスターリンズムの名で称ぶことになるが——も、この時期の彼にあつては、唾棄すべき決定論の別名でしかなかつた。彼が欲しかつたものは、意識の自由、現実をのり越えることによつて現実を変えていく人間の自由の実現とその論理であつた。であればこそ、そこに見出したフッサールの「志向性」の観念は、彼にとつての天啓だつた。超越としてのイメージという考えは、自らにうつつけの主題としてサルトルの目に映つたに違いない。

問題についてのモチーフが切実であればあるほど、それはアプローチの方向を現制づけて行く。これはあまり例外のない一般法則と云えるだろう。中期の主著である『存在と無』が、彼の運命的な盟友であつたM・メルローポントティによつてさえ、その過度の思弁性を指摘されていることは、よく知られた事實である。『想像力の問題』においても、現象学的記述をとりながら、なお、すでにその主体性の形而上学への護教的傾斜を感じないわけにはいかない。しかし、その点、いわばその序論的役割を担つた『想像力』は、簡略ながら、デカルト以降のイメージ理論の批判的学説史の形をとつたせいであろうか、思弁らしい思弁もなく、明確な論点だけが、素直に浮かんで来るように思われる。

イメージの問題に献げられた過去数十年の文献をふり返ったサルトルが、そこに見出したものは、実に多種多様の見解が展べられているにも拘らず、その多様な見解の底には、同じ一つの理論しか存在していないという事実であった。その理論とは、と彼は指摘する。元来素朴な存在論が一七・一八世紀の大形而上学者によって、組織的に補完されたものにほかならない。

「純粹でア・プリオリな理論はイメージを一種の〈事物〉にした。しかし肉面的直観は私たちにイメージとは事物ではないと教える。それでこのような直観の所与は次のような新しい形式の下に理論的な構造に合致しようとする。つまりイメージとは、それがそのイメージである元の事物と全く同じ程度に、一種の事物である、というのだ。しかし、それがイメージであるという事実そのものから、それは、それが表象する事物に対して一種の形而上的な劣弱性を身に受けている。一言で云えば、イメージとは一段劣った事物なのだ。かくて今やイメージの存在論は完璧となり組織的となる。イメージとは一段劣った事物であり、それはそれに固有の存在性を持ち、他のあらゆる事物と全く同様に意識に与えられ、それがそのイメージである元の事物と外在的な関係を保つ、というわけだ。」

イメージと思考との関係に至って、デカルト、ライプニッツ、ヒュームの三人は、初めてそれぞれに違った見解を示して、三つの類型を形成することになったが、イメージそのものについての基本的な観念は全く同じもの、つまり、右に引いたとおりの観念を共有していた。そして、彼らに続く後代の実証心理学者達は、この三つのタイプのタイプを選択に心を煩わせることさえもなく、こうした古典的な理論に安住して疑うことがなかった、とサルトルは論断している。

細部について、例えばリポールの評価についてなどの点で、問題を感じないわけではないが、ヨーロッパにおけるイメージの精神史としてのこの内在的な分析と判断は、サルトリアン以外の読者にとっても、その限りにおいて、今日なお、十分意味を持っている。

近年、広く人文科学の分野で注目を集めた研究者の一人に、言語学者のN・チョムスキーがいる。普通文法についてのその大胆な理論構成が、言語学の領域を超えて、大きな関心を喚び起した理由の一つは、その考えが、人間の「言語能力」の生得説と表裏一体のものだったからと

思われる。この「言語能力」に関しては、例えばフランクフルト学派のJ・ハバマスなどが批判的な議論を展開しているが、しかし、その生得性についての指摘は、恐らく議論の余地はないものように見える。ただし、チョムスキーの場合、そこから一挙にデカルトの伝統を想起し、言語の普遍性を介して理性の優位を強調するところを見ると、やはり、そこにヨーロッパの伝統が、牢乎として生きていると感ぜずにはいられない。

「はじめにことばありき」という聖書の一節を持ち出すまでもなく、明晰な観念は、ヨーロッパにおいて常に言語を伴う理性なり、悟性なり、すなわち精神の側の属性であった。一方、思考の材料としての感覚印象や知覚は、それに比して、常に雑多であり、不明瞭であって、それは外在的な物質としての事物が、同様、物質としての身体を介して、精神の前に無秩序に齧らされたものでしかなかったのである。

実は、先に触れたイメージについての歴史的な概念の中で、サルトルが抽出したあの特徴、すなわち、一種の劣弱性を持った事物という見方は、結局、イメージを感覚や知覚の側、つまり、事物の側に引きつけることによって成立していた見方だったわけである。

すでに見たように、サルトルは、イメージを知覚から強く弁別することによって、その独自の作用、主体的で創造的なその特性を強調してみた。しかし、考えてみれば、この弁別の強調は、精神と物質という伝統的な二元論に内在するアポリアを、解消の方向よりは、むしろ逆の方向に強化する結果となりはしないか。イメージを精神の側にすくい上げるそのかげに、知覚は依然として事物の側に積残されていく。サルトルのイメージ論の根本的な弱点は、この最も長所と見える部分と重なり合っていると見なければならぬ。彼はヨーロッパに伝統的な思念的な枠組みである「ことば中心主義」を自ら意識化せずに、現実―非現実という二つの次元を性急に設定し、その枠組みの中でイメージに関する思考を展開したばかりに、折角の貴重な問題意識を思弁哲学の中にフェイド・アウトさせてしまった。

ともあれ、こうした「ことば中心主義」は、ヨーロッパの歴史と風土に根ざした、いわば、特殊ヨーロッパ文化の産物であって、必ずしも、全人類、全文化にとって普遍的で理想的な発想および信念というわけではない。もっとも、こういう見方自体が漸く最近に私たちのものになった見方であって、明治以来、近代化を意識した私たちの先人達は、この発想と信念に関して、彼我の間に落差を認め、あるいはその落差に慨嘆し、あるいはそれを埋めるために努力を費してきたのであった。恐らく、こうした「ことば中心主義」と、世界に先んじて近代文明を建設しえたのがヨーロッパだったという事実との間には、深い内的関連があったに相違ない。しかし、その事実についての評価と、「ことば中心主義」

というものが特殊ヨーロッパ文化の産物だという認識とは、おのずからそれぞれ別のことである。比較のための資料が十分整っているわけではないが、例えば、マンダラ思想や、禪における不立文字の考え方など、非ヨーロッパの文化圏において、少くとも、言語によらない思考、ないし、言語によらない情報行為の独自の存在と意味とが、広くかつ十分に承認されていることを示している。

実を云えば、当のヨーロッパにおいても、その主流を占める「ことば中心主義」に対し、古くから、異議申立てがなかったわけではない。しかも、興味深いのは、この種の異議申立てが、近來様々な分野で続出してきたことである。

例えば、メルロイポンティが終始一貫追及し続けた主題は、サルトルがイメージの問題をフィギュアとして押し出すために、いわばグラウンドとして利用したその知覚の問題であったことも、その一つの現われとして見ることができるだろう。同じフッサールの強い影響下で思索を初めたこの二人が、一人はそれを閉ざされた主体性の形而上学に収斂し、一人はそれを強引なまでに「開かれた現象学」たらしめるために、目眩めくような努力を払っていった背景には、それぞれが知覚の問題にどこまで関わっていったかという事実と、深く関連していたはずである。

しかし、ここでは、ポンティよりも、むしろ、彼が大きな関心を寄せていたゲシュタルト心理学のグループに近い、R・アルンハイムの提言を挙げる方が適切であろう。知覚、なかならずく視覚についての永い実証的研究の成果に立って、アルンハイムが『視覚的思考』(Visual thinking, 1969)で行なったことは、文字どおり、「はじめにことばありき」を否定し、「はじめに知覚的思考ありき」を主張することにあつた。彼はサルトルが見過ごした領域における専門家としての立場から彼らの文化の思想的伝統に正面切って挑戦を試みている。

サルトルも、知覚の中に「無数のイメージの口火になるようなものが存在している」ことを認めなかったわけではない。しかし、彼の関心は、その事実の精査に向けられるよりも、イメージが知覚的意識の廢滅を「条件」として成立するというそのオルタネーティヴの強調にあつた。アルンハイムの関心は、知覚とイメージの断絶よりも、その連続性に向けられる。彼は多くの実験と文献から、知覚における高度の抽象過程を様々な形で示し、知覚内容が、どれほど単なる外界のコピーでないかを例証する。言語が介在しなくとも、外界の文脈から事物を選択し、抽象し、それを対象として措定する知覚作用が、どうしてそのまま人間の高度の思考と云えないのか、と問いかねながら、彼は知覚と記憶とイメージとの連携による思考こそ、様々なレベルで、すなわち、芸術ばかりでなく科学においても、人間の創造的な活動を用意する具体的な母胎であることを、執拗に説いている。

もちろん、その主張の内容は全て実証済みの知識の集積というわけではない。それは問題の性質上止むをえない事情であって、むしろ重要な点はそこに示される仮説が生産的か否かにあるとよいていただろう。例えば、思考におけるイメージの役割について、彼の推論に耳を傾ければ次のとおりとなる。先ずアルンハイムはこれまでのそれに関する論争を振り返って、その不毛性を衝き、そうなった第一の理由は、これまでの論者が暗黙裡に認めていたのが、「イメージが思考のなかに含まれるのは、それが意識のなかに見られるときだけだ」としていることである」と云う。しかし、それは識閥下で行なわれているかも知れないし、あるいは、意識に捉えられてはいても、それが被験者のイメージ觀念に合わないために報告されることがなかったのかも知れない。むしろ、思考に現われる「心的イメージの不完全さは、単なる断片や不十分な把握ではなく、積極的な性質である」と指摘したティチェナーを、「新時代の声」として賛意をもって引きながら、このいわば不完全に見えるイメージは、その不完全さによって、かえって抽象的ならびに象徴的に働くことの自由を得、創造的な思考を可能にする重要な鍵作用を担っているのだ、と彼は推論する。この検証が極めて困難なものであることは云うまでもないが、しかし、この一点だけでも、アルンハイムの仮説が傾聴に値いするものであることを、十分示すことができると思われる。

デカルトによって定立された自立的な「精神」なるものが、神によって与えられたものと考えられていた時代から、やがて、長い生物進化の過程で獲得されてきたものと見られる時代に移るに従って、認識論自体に大きな混乱が生じてきたことは、思えば当然のことであった。進化論が自明なことで考えられている今日でさえ、なお、エソロジスト、K・ローレンツの云う次のような認識論上の仮説を、私たちの誰もが明確に意識して受け入れているかどうかは疑わしい。

「すべての人間の認識は、どこまでも現実的で活動的な生きたシステムでもあり、また認識する主体でもある人間が、彼の認識の対象である、同様に現実的な外界の事実と相互に作用しあう過程に基礎づけられている。」(『鏡の背面』Die Rückseite des Spiegels, 1973)

サルトルは、やはりこの仮説を受け入れることはないだろう。彼の関心は鏡の向け方であって、鏡の背面をのぞきこむことではない。しか

し、アルンハイムは、明らかにこれを慎重に配慮している。

二うまでもなく、進化論には今日なお無数のブラック・ボックスが内蔵されている。人間の進化の過程も、その生物的メカニズムを含めて、いわば仮説の連続といった観を呈していることは否定できない。しかし、ある分野の学問が幸運にもそれまでのチャージを突然に解放して、人間の知的地平を一挙に拡大するという時期があるものである。今世紀初頭の物理学がそうであったとするならば、中葉以後にその役割を果しつつあるものは、分子生物学から動物行動学を含む広義の生物科学がそれに当ると云えるかも知れない。

これらの分野で生まれつつある知見が、従来の人文科学の問題に直ちに役立つとは云えないまでも、多くの局面で大きな影響を及ぼしだしているのを気づかぬわけにはいかないだろう。たとえば、E・アイブスフェルトは、彼の創案による特殊カメラを駆使して、ダーウィンが手をつけた表情の研究に新たな展開をみせ、成果として、人間の非言語的なコミュニケーション形式の中には、文化を超えた生得的なものがあることを見出した。（『愛と憎しみ』Liebe und Haß, 1970）また、ヤーキーズ霊長類研究所のエノロジスト達は、D・プリマックの開発したプラスティックの言語をさらに発展させ、「ラナ」という名のチンパンジーに九つの要素を組合せた数十の図形語を覚えさせ、それをコンピュータ連動のキー・パネルに図示し、それを文法正しく押させることを通して、人間と話し合うことに成功している。これらの研究は、チョムスキーのいわゆる生得的な「言語能力」を支える、さらに一段と基層的な情報行為能力のメカニズムに対する貴重な測針として評価できるだろう。また、同様なことが、神経生理学においても行なわれている。これも一例だけ挙げれば、W・ペンフィールドの幸運な実験は、記憶のメカニズムに驚くべき知見を供した。この結果、私たちの脳には、あたかも無数のヴィデオ・テープがぎゅちりつみこまれているような形で、過去の知覚情報が蓄積されていることが判ってきた。人間以外の高等動物も高度の記憶能力を持つことが次第に明らかにされており、そのメカニズムはわれわれとかけ離れたものではないようである。

生物の情報活動とは、原理的に云って、遺伝的に組み込まれているものを含みながら、知覚による外部情報を、記憶という情報ストックと照合しつつ、適切なアウト・プットを行なう一連の行動にほかならず、人間だけがその例外とは考えられない。これらの知見は、すでに記憶とそとの利用という過程の中で、言語操作によらず、蓄積された知覚情報の抽象化と構造化が行なわれている事実を想定させる。知覚に思考の端初を見出すアルンハイムが強調するのはこの点であり、彼は、ローレンツのいう「鏡」の前後を見比べながら、ここに創造的思考の基礎を探ってい

るのである。

サルトルはその『想像力の問題』の中で、実にしばしば「友人ビエール」の顔という具体例を提出している。知覚とイメージという二つの意識、すなわち、対象の「狙い方」について論及する上で、この例示は頗る便利と思われたからであろう。友人ビエールは、成程、知覚することも出来るし、イメージとして措定することもできる。しかし、イメージすることは出来ても、知覚することはできないものがこの世にはある。サルトルがこの例として好んで挙げるものは「サントール（半馬人）」である。

ところで、理論的には知覚が可能でも、現実的にはそれが不可能という対象が、同じくこの世には無数に存在する、それは「友人ビエール」でもなく、さりとて架空の「サントール」でもない。いわば「神とコップ」の間にある広大な領域がそれである。多くの日本人にとってアメリカ大陸がそれであり、天安門広場もそれであり、また、マリリン・モンローもそれである。サルトルはこれらについて殆んど言及するところがないが、周知のように、これらは社会心理学や政治学、あるいは経営学において、つまり、一般に社会科学のタームとして使われる「イメージ」の語が指示するところの当のものである。イメージを広く社会行動との関わりで考えるこのアプローチの源流に、W・リップマンの『世論』（Public Opinion, 1922）を挙げることは、今日の常識と云っていい。しかし、こうしたパースペクティヴの理論的枠組の土台を作り上げたという点で忘れることが出来ないのは、いわゆる「象徴的相互作用」学派の中心人物、G・H・ミードの業績であろう。彼が、先に引いたローレンツの認識論上の仮説のいち早い採用者であったことは、その『精神・自我・社会』（Mind, Self and Society, 1934）に明らかである。「精神は社会過程——従ってコミュニケーション過程——の産物であって、決してその逆ではない」という大仮説が、この主著の基本主題であることは、今さら述べるまでもないけれど、それはまた、「はじめに行為ありき」という立場からする、ヨーロッパの思想的伝統への挑戦であったという側面を、念のためここで指摘して置こう。かつて、経済学者のK・ポールディングが「アイコンックス（イメージ学）」なる新科学の定立を提唱したとき（『ザ・イメージ』The Image, 1956）、彼は「ジョージ・ミードに、第一級のイメージ学者という名誉を与えなければなら

い」と書いたことがある。ポールディングはそれ以上特にコメントしているわけではないが、彼がミードを目してそのように述べたのは、ミードの、状況の先取りとしてのイメージ、すなわち、自他の行動を可能態の形で予じめ脳裏に描くというイメージ活動への注目、あるいはもつとつきつめて云えば、一般に行動はイメージに依存するという基本的事実を明確に指摘した点に、大きな意義を見出したからにはかなるまい。勿論、ここでのイメージは、いわゆる直観像に近い、スタティックな「友人ピエール」のそればかりでなく、アルンハイムが強調する、不完全で、断片的でありながら、反って積極的で象徴的なダイナミックなイメージを含むものであることは云うまでもない。そして、今日のイメージ論には、こうしたイメージの機能と役割についての認識も、それにふさわしい場所が用意されて当然である。

『想像力の問題』には、想像力の作用が魔術的作用である点について触れられたところがある。それは、思念の対象物、欲する事物を、それを占有出来るような仕方では出現せしめる使命をもった呪禁である。もっとも、ここでもサルトルは、それを実際の呪術や宗教の中で広く分析しようとしなかったけれども、元来、呪術や神話とイメージの結びつきについては、はやくから文化人類学が多大な興味を示し、多くの論及が行なわれてきたことは、よく知られた事実である。しかし、それを明確に「イメージの問題」として、改めて把え直そうとしたものは、H・リードの『アイコンとアイデア』(Icon and Idea, 1956)の出現まで待たなければならぬ。

今日見ることが出来る人類最古の記録である洞窟画から、現代までの芸術の歴史を考えるうちに、リードの内部に生じたものは、まさしく「はじめにイメージありき」という想念だった。「人間意識の発展において、もしもイメージがつねにアイデアに先行するならば、そのときにはわれわれは文化史を書き直さねばならぬばかりか、われわれの諸哲学の根本仮定をいま一度検討し直さねばならない。」彼は序文ではっきりこう述べている。そして、この書物で彼が試みたことは、その仮定形を断定形に改めるための論証であった。

リードはそこで、これまでに知られた先史時代の研究から、それが断片的な証明である点にさえ留意すれば、人間的な意識の最初の夜明けを再構成することは不可能でないと云う。

「この意識は、まだ論理的なものではなく、因果関係を知らないが、同時性には気づいているものである。——言いかえると、場所を異にした出来事の中に心的な関連をつけることができる意識である。この関連が今日いう意味での、理性と論理から見て、いかに非合理で非論理であろうとも、〈関連をつけること〉——それが文明における最初の一步であり、最初の呪術的な保存であった。しかし、関連は、直接的な知覚から分離した記憶のなかに貯えうるイメージの記号によってのみ、つけられた、——すなわち、見ることが出来るようにされ、知覚しうるように現実化され、表象されたのである。記号が生み出されて、はじめて、ある出来事のある出来事に対応させたい声なき欲求が、同時性の理を知りえたのだ。」

リードはかつて、芸術が起源的には祭式の副産物であるという見解に対して、祭式こそ芸術の副産物と見なすべきだと主張したことがある。しかし、この議論で先後関係を論じてみても、大した意味があるとは思われない。むしろ、重要なことは、彼がここで確認しているとおり、「人類の発達においてただ一つ優先するものは生命力の優先——生きんとする意志の優先であって、あらゆるわれわれの能力はこの専制的な欲求に仕える。呪術（後には宗教）とひとしく、芸術もまたこの唯一の衝迫に対する、複合せる応答の一端である」事実が留意されればよいのである。そして、この応答がいずれも根本的にイメージの力を籍りる事によって、はじめて可能となった点を見届ければよいのである。

リードはイメージの問題を結局は芸術に引きつけて考えているため、私たちはこの書物の中に、呪術ないし祭式におけるイメージの機能、あるいはイメージ思考の形式についての十分に展開された議論に接するわけにはいかない。しかし、確かに洞窟画の存在は、少くとも数万年以前にすでに人間が呪術を行なっていたこと、そして、そのことは、呪術という社会的行為を可能にする独自の思考形態をすでに人間は我がものにしていたという事実を合わせて物語っている。リードの功績はこの独自の思考形態が、先ず「関連をつけること」に始まるイメージ活動であることを、端的に指摘した点に認められよう。

ところで、こうした問題を追って行くとき、未開社会の思考に早くから関心を寄せていたL・レヴィ・ブルジュルを想起することは、あながち唐突なことではない。今日、多少の批判はあっても、彼が「融即の法則」という名で始めてヨーロッパの近代的な読者の前に示して見せたのは、ある意味で、この関連をつけるイメージの活動形式に関する、一種の概念図式であったと見ることが出来るから。

しかし、それにしても、リードは何故、人類の意識の夜明けを再構成し、そこに、関連をつけることの決定的な重要性を指摘しながら、もう

一つの重大な事実と言及しなかったのであろうか。それは、同じ意識の夜明けの時点で、人間が見えるものの背後の見えないものに気づき出した、という、なお説明の困難な、しかし、情報活動の進化史上、疑いもなく重要な事実にはかならない。「云うまでもなく、アニマの発見がそれである。

アニミズムとプレアニミズムをめぐる論議に関しては、ここで触れる余裕もないし、必要もない。ここで云うアニマとは、精霊であり、呪力であり、魂であり、神である。つまり、触知できる事象の背後に棲んで、それを動かすところの何ものかの一切である。もちろん、それが「発見」であるのか、「想定」であるのかは、ここで早急に即断を下す必要はないだろう。

知覚を超えたイメージによるこの情報活動の展開が、どのような過程をとおして行われてきたのか、という点については、現在のところ推測さえ困難である。しかし、それが人類の発展史にとって決定的な画期であった点については、疑いを挿む余地はないものと思われる。G・H・ミードは、先に引いた書物の中で、やや文脈から浮き出したような形ながら、人間の最初の「自我」の観念が、ここで云うアニマの意識によって齎されたことを示唆している。確かに、それは一方で「自我」の意識を成立させると同時に、他方では、「世界」の誕生を意味するものとなつたであらう。「世界」とは、「関連」の体系にほかならず、さまざまなアニマのイメージは、「関連をつける」イメージ活動によってはじめて、統合され、体系化されることが可能になつたであらうから。

アニマの発見は、人間の世界を、文字どおりアニメイトしたと云うことができる。知覚の範囲内においても、行動の相互作用というパターンで事物を把握する人間が、知覚を超えたところにアニマを感じ出すかぎり、知覚の背後に棲むアニマの行動の相互作用という同じパターンで世界を把握しだしたのは自然であつた。ここでつけ加えて置けば、行動の相互作用というパターンで事物を把握することを、私たちは一般に「劇的」と呼んでいる。

これまで触れてきた人間の情報活動は、必ずしも言語が介入しなくても成立しうる活動であつた。そして、人類の意識の夜明けにおいても、すでに存在したと思われる人間の思考は、恐らく、イメージによって導かれる思考であつたと、今は云いうる地点に立っているとと思われる。しかし、イメージ的思考というものが、それだけ重要な役割を人間の情報活動に対して担ってきたとするならば、そこには、当然、独自の文法ないし活動法則が見出されて然るべきではないだろうか。

こうした見方で、改めて私たちの思考活動の全般を見直すとき、従来、論理の法則と考えられてきたものに、あるいは、むしろ、イメージの法則と見なした方が適切ではないか、と思われるものがチラチラと見えてくる。特に、一二の例として挙げてみたくなるのは、類比の論理と、弁証法のそれである。類比に関しては、いわゆるパターン認識との関連で、とくに知覚に関する実証的なアプローチが、こうした仮説を補強する方向で進行していると思われる。また、社会学者のR・ニスベットが、最近の著作『芸術形式としての社会学』(Sociology as an art form, 1976)で展開している発想も、まさにこのような方向に向けられたものである。一方、弁証法については、アルンハイムの仮説をはじめ、これまでに触れてきた幾つかの仮説群が承認されたとき、はじめて、イメージの文法として「アイコニクス」の中に位置づけることが許されるのであろう。しかし、恐らく弁証法ほど、イメージ思考の特色が鮮明に見られるものはないのではないか。残念ながら論証は極めて不完全ではあったけれども、映画監督のS・エイゼンシュタインの直観は、弁証法の秘密をいち早く見抜いていた、ということができるかも知れない。少くとも、ここでは、言語が殆んど色褪せた役割しか演じていないことを、感じとらぬものはいないだろう。もちろん、こうした見方は、弁証法を単なる恣意の戯れにおとしめるものではない。おとしめると思うものは、依然として「ことは中心主義」の呪縛から自由でないものであり、思考の創造性に思いを致さない証左である。

いずれにしても、重要な点は、人間のイメージ活動というものは、言語以前に成立し、言語活動を用意するものであったと同時に、言語以後、すなわち現代の私たちの情報活動においても、なお、私たちを根底において動かしているメカニズムとして、どうやら、基本的には同じパターンで営みつつづけているらしいという事実である。それは、人間のあらゆる思考活動にみずみずしい創造性を保証する一方、他方では、人間の対立と闘争と、それへのエネルギーを用意する駆動力としても作用する。それはまた、社会の秩序と統合に不可欠の思考形式である一方で、変化と分化への無限の人間の資源でもある。人類の運命が大眾によって決定されて行く今日の時代において、両刃の剣であるイメージの研究は、困難さとともにその重要性を増していると思われる。